

JRCC NEWS

2007 夏季号



レスポシブル・ケア®



梅雨から夏の日本の四季の移り変わりを、紫陽花が咲く箱根旧街道で感じました。
(富士フィルム・長 康夫さん)



バリカサグ (フィリピン) の「ゴールデンバラクーダ」。運良く群を見つけても隠れてしまうので完全な姿はなかなか撮れません。(大日本インキ化学工業・高橋 雅人氏夫人 久美さん)

JRCC だより

☆行事予定

- 8月8日 会員交流勉強会 (シリーズ2回目)
- 10月10日 会員交流勉強会 (シリーズ3回目)
- 10月22～24日 RCLG 会議 (パリ)



第13回通常総会開催



富澤会長挨拶

レスポンシブル・ケア協議会が設立12年目を迎え、社会との対話、検証活動の充実、東南アジアのキャパシティ・ビルディングへの貢献など活動が大きく発展し、化学産業の事業活動に対する社会からの理解と信頼を得ることができた。今後もICCA（国際化学工業協会協議会）の方針のもと、グローバル社会の一員として世界各国のレスポンシブル・ケア活動団体との連携を進め、積極的に活動を推進する。それにより企業の社会的責任を果たし社会からの信頼の向上を目指す。



議案

- ・平成18年度事業報告書（案）及び決算報告書（案）の承認
- ・平成19年度事業計画書（案）及び収支予算書（案）の承認
- ・役員の一部変更等が審議され原案通り承認された。

平成19年度の重点推進事項

- 1) プロダクト・スチュワードシップ（PS）の一層の強化、推進
- 2) RC活動の継続的な改善推進と普及
- 3) 検証活動の充実による説明責任の遂行
- 4) RC活動の社会に対する認知度のさらなる向上
- 5) ASEAN諸国に対するキャパシティ・ビルディングの推進
- 6) JRCC運営体制の機能強化
特に1) から4) においてはコンプライアンス問題への対応方を織り込む。

2007年5月30日（水）、丸の内パレスホテル チェリールームにおいて富澤会長以下役員、顧問、会員企業の関係者92名の出席のもと、日本レスポンシブル・ケア協議会の平成19年度第13回通常総会が開催されました。

平成19年度事業計画

1. 企画及び運営の方針

新「環境・安全に関する日化協基本方針」に則り、日化協との連携によるRC世界憲章の浸透に努める。

2. 活動計画

1) プロダクト・スチュワードシップ（PS）の一層の強化、推進

世界的な化学物質管理の充実が求められている状況下、RC世界検証に謳われているPSを強化する目的で、グローバルな化学物質管理に関する戦略（GPS）の目標達成に努める。

2) RC活動の継続的な改善推進と普及

- ・会員交流会、勉強会の企画立案、実施
- ・RCベストプラクティス共有推進
- ・会員のグループ企業登録の推進

3) 検証活動の充実による説明責任の遂行

- ・検証受審会員数の増加
- ・検証内容の充実
- ISOとの差別化の推進、報告書検証の内容充実

4) RC活動の社会に対する認知度のさらなる向上

- ・報告書報告会、地域および市民対話、PSワーキンググループ(サプライチェーン)及び広報活動などの場を通じて常にステークホルダーの幅を広げる努力をする。
- ・報告書ワーキンググループ関連

RC報告書はカラー化のメリットを活かした内容の充実を目指す。特に読者の興味を呼ぶ報告書作りを目指す。

・対話ワーキンググループ関連

地域対話の継続、消費者対話・学生対話の実施。対話スキル向上を目的としたリスクコミュニケーション研修の実施。

5) ASEAN諸国に対するキャパシティ・ビルディングの推進

JRCCの重点推進項目の一つでありAOTS（(財)海外技術者研修協会）やJETROを通じRCおよびGHS（分類調和）の普及活動に努めている。本年も一層の支援活動を行う。

6) JRCC運営体制の機能強化

- ・JRCC運営体制機能強化を目的として、規約・規則類を改訂。また改訂内容の周知徹底を図る。

- ・組織の機能強化のためワーキンググループの改廃、新設など見直しを行う。

7) その他

- ・ICCA/RCLGメンバーとしての国際協調活動の積極推進
- RCLG運営グループ会議（マイアミ）およびRCLG会議（パリ）への積極的な参加
- ・APRO(アジア太平洋レスポンシブル・ケア機構)メンバーとしてAPRCC(アジア太平洋レスポンシブル・ケア会議、2007年11月マレーシア開催予定)に参加し地域のRC活動推進に協力する。

役員変更等

退任：監事 小野寺薫（コニカミノルタホールディングス（株）顧問）

補任：監事 松崎正年（コニカミノルタホールディングス（株）取締役 常務執行役）

今年度役員

会長 富澤龍一（三菱化学（株）取締役）

副会長 奥村晃三（大日本インキ化学工業（株）相談役）

監事 大平晃（三菱ガス化学（株）会長）

監事 松崎正年（コニカミノルタホールディングス（株）取締役 常務執行役）





VOICE

適正な情報を迅速に…

主婦連合会 会長
兵藤 美代子

レスポンシブル・ケアの活動報告会には、機会あるたび参加し、企業の環境、安全対策に取り組んでいる姿勢を拝見してまいりましたが、今年2月2日、千葉地区の地域住民との対話集會に自主参加させていただき、貴重な体験をいたしました。地域集會は「第6回千葉地区地域対話集會」で、東京湾に面した房総半島の付け根、市原市から木更津に延びたコンビナート地帯、日本の大きな化学メーカーが軒を連ねています。

千葉市民の一人として私も目の前に広がる工場地帯の防災対策は日頃から気になっておりました。五井駅前に集合、そしてバスでチッソ石油化学株五井製造所の工場見学からスタートしました。見学後開催された対話集會には多勢の住民の方が参加され盛会でした。會議は「化学会社の保安、防災に関して」のテーマで、企業の取り組み事例の発表、次にこの日のメイン、住民代表と工場側との対話となり、災害や地震時の保安体制や、防災設備、災害に対しての訓練等の質問、特に東京湾直下型地震を恐れる住民の方達は、地震時の対策への質問は具体的で、大きな災害の要因となるであろう工場群を目の前にして真剣そのものでした。大変厳しい質問もあり、工場側も丁寧な回答でした。また会場からの参加もあり、住民との生のやりとりは大変意義のあるものと感激しました。今後このような会合を重ねることにより、信頼関係を密にし、住民参加の共同防災に発展するのではと思いました。

今回の集會で感じたのは、災害、地震時に住民が一番必要とするものは「事故や災害規模情報等のスピーディーな発信伝達」ではないかということです。緊急時対応のシステム作りこそ、第一になされるべきです。スピードある情報発信がなされていれば、最近の大きな社会問題となったパロマの一酸化炭素中毒等、連続して発生した事故を未然に防止することができたはずで、消費生活用製品安全法が事故を契機にスピーディーに改正され、事故情報の報告義務が強化されましたが、スピードこそ命と思えてなりません。

主婦連合会は昨年「リコール社告」の調査研究を行いました。新聞紙上に掲載される「リコール社告」はメーカーの事故製品の情報および回収への協力を各社思い思いの形態で記載したのですが、消費者が十分内容を理解できないものが多数見受けられました。事故情報の一つとして事故発生、拡大防止へ向け「リコール社告」のあり方を見直し、社告の「規格化」に向け、行政、企業にも働きかけています。

レスポンシブル・ケアの地域集會に参加し、情報伝達の大切さを知ることができました。今後の運動に役立てたいと思っております。

第1回RC賞 受賞者紹介

JRCC 会員交流会において第1回RC賞の授賞式が行われました。受賞された方々の業績を紹介します。



会員名	表彰テーマ	対象者数	活動内容要旨
宇部興産株環境安全部 鶴谷 巖 藤川 修三 阿部 正博	宇部地区でのRCコミュニケーションの活性化	3名	山口西地区RC地域対話を契機とし、RC報告書を活用して住民への成果の公表・対話を活発化し、特に上記地域対話とは別に毎年近隣4社合同で宇部小野田地区RCミニ対話集會を実施
住友化学株 レスポンシブル ケア室 奈良 恒雄	化学企業をリードする先進的RC活動の推進	1名	「事業者による環境パフォーマンス指標ガイドライン策定事業」(環境省)へ業界を代表して参画。また国や地方自治体の職員、学生らにRCや化学業界の化学物質管理の取り組みを教育(5年間以上継続中)
JSR株四日市工場 波田 尚志	四日市地区でのRC活動	1名	四日市地域環境対策協議会にて活動をリードするとともに、ICETTの要請による研修生受入れや中国での講演を通じ、世界各国の環境・安全技術者の養成に貢献
昭和電工株大分事務所 鈴木 俊郎 松井 信行 薬師寺 一行	大分地区におけるRC地域対話を中心とした、地域とのコミュニケーションの深化	3名	大分地区RC地域対話(1回~5回すべて)において一貫して代表幹事社を務めると共に、地域のニーズを的確に捉え、より一層コミュニケーションを深める活動(RCミニ対話、工場見学会、出前授業、コンビナート広報誌など)を展開
コニカミノルタホールディングス株 社会環境事業部 北 陽子	市民対話とリスクコミュニケーションの実践および普及活動	1名	化学企業としていち早くリスクコミュニケーションに取り組み、各地で事例発表を行うことでその普及に努めるとともに、学校や市民団体にRC活動を紹介

受賞された皆さん



宇部興産・藤川氏



住友化学・奈良氏



JSR・波田氏



昭和電工・薬師寺氏



コニカミノルタ・北氏



国内主要工場において、 早期にゼロエミッション

電気化学工業株式会社

代表取締役専務 技術総括 伊藤 東さん

創業以来の社名の由来は…

—電気化学工業の特徴を聞かせてください。
伊藤 当社の創業は、第1次世界大戦が終結した1915年です。当時、ドイツからの肥料の輸入がストップしたことに伴い、日本国内の天然資源を利用した窒素肥料の生産からスタートしました。原料となる石灰石と石炭に、水力発電による電気を通してカーバイドを生成し、これを空気中の窒素と反応させて石灰窒素、すなわち窒素肥料を製造します。電気により化学反応を起こすので、「電気化学」というのが社名の由来です。窒素肥料は尿素や硫酸より高価ですが、痩せた土地を回復させる土壌改良剤としての効果も見込めるので、現在でも利用されています。一方、カーバイドに水を加えるとアセチレンが発生するので、これを原料としたクロロプレンの生産も行っており、また石灰石を砕く際に派生する粉を利用したセメント事業も新潟・富山・長野の3県主体に展開しています。これらの製品は石灰石の埋蔵量50億トンという黒姫山に隣接する青海工場で生産されています。石油化学部門の拠点は千葉工場、スチレンモノマーを重合した特殊



埋蔵量50億トンを誇る石灰石原石山

なポリスチレン樹脂やABS樹脂等が主力製品となっています。清涼飲料水等のペットボトルの表面に商品名を記載したシートは、7割程度が当社の製品です。これはスチレンとブタジエンを共重合したもので、シートが付いたままのペットボトルを粉砕して水に入れると比重の違いから分離回収できるため、リサイクルが容易になるという特長があります。大牟田工場ではカーバイドを処理する際に用いる独自の電炉技術から、セラミックス系の製品を扱っています。溶融シリカは半導体の封止材として、高級品では世界の約7割のシェアを占めています。渋川工場は当社の保有する有機・無機の技術を融合した電子材料関係が主力製品です。その他、医薬品や化粧品等の素材も供給していますが、化学メーカーの宿命で(笑)、当社の名前が一般消費者の皆さんの目に触れることは殆どありませんね。2006年度の売上高は単体で約2500億円、連結で約3500億円です。

生産活動と社会との関係を見直す契機に

—レスポンス・ケア導入後、変化した点は何ですか。
伊藤 以前は工場を中心として近隣に対する公害防止や作業環境の改善に主眼を置いていましたが、レスポンス・ケアは原料から生産・使用・廃棄に至る製品のライフサイクル全般に及ぶ活動なので、我々がいかに幅広く環境課題に関わっているかということに否応なく知らされました。自分達の生産活動が、社会とどのような繋がりを持っているのかという点を見直す良い機会になったと思います。現場においては具体的な数値目標に取り組むことにより、成果が明確に示されるようになりました。また廃棄物削減や省エネルギーの推進によって品質は向上し、コストは下がるといった現象も見られますね。
—環境対応設備の増強等で、投資が必要なケースもあると思いますが…。
伊藤 排出削減等のために、かなりの設備投資を行いました。

ンを達成したいと考えています。

同時に監視体制や工程管理の強化を進めたので、これらは生産技術の向上にも寄与したと考えています。

—製造現場の反応はいかがでしたか。

伊藤 レスポンス・ケア導入当初は「面倒なことを始めたな」という声も聞こえたのも事実ですね。しかし実際に活動してみても成果が顕著に現れてくると、その気になるものです(笑)。会社側も表彰制度を設けるなど、社員の意欲高揚に働きかけ、現在では完全に定着したと感じています。

資源生産性の向上に真剣に取り組む

—最近各社共パフォーマンス・データの横這い傾向に苦慮しているようですね。

伊藤 創立100周年に向けた「デンカ100」と称する経営計画の中で、資源生産性の向上という言葉を用いて収率や歩留りのアップ、副生成物や廃棄物の再利用促進といった活動を始めました。環境に配慮するだけではなく、資源をより有効に利用することを真剣に考えないと企業として生き残っていけない時代ですからね。実際に、かなりの項目について改善提案が上がってきています。一方で環境投資、保安投資を一段と強化するという対策も講じています。PRTR法の施行により、事業所別の有害物質排出量が公表されるようになりました。ある地域で電気化学工業が最も排出量が多いとすれば、企業イメージの面からも好ましくありません。規制値をクリアしている、或いは生産量が多いから仕方がないということではなく、絶対量を減らすために投資を行い、技術開発を進めたいと考えています。

—保安防災活動についてはいかがですか。

伊藤 当社に限らず、プラントの老朽化が事故に繋がるケースが増えてきましたね。その対策として配管のチェックや寿命予測を綿密に行い、事故が起きる前に補修するという予防保全に力を入れています。当然、費用は掛かりますが、事故・故障による生産の機会損失を減らすことになり、トータルで



木くず、廃材など廃棄物を利用したバイオマスボイラー

はプラスに働いていると思います。

—所謂2007年問題、安全技術の伝承に関する施策は？

伊藤 単に技術を継承するのでは、古いものを引継ぐだけでは不十分だと思っています。新設備の稼働により生産速度は上がり、エネルギー密度も各プラントで増加しています。従って基本的な技術を踏まえた上で、最新の技術体系を構築しなければなりません。当社では人材育成センターを設置し、新しい教育プログラムにより化学の知識や安全に対する考え方を習得するシステムを確立しています。並行して、より安全な作業方法や設備を常に追求するという活動を展開しています。

地域とのコミュニケーションを更に深めていきたい

—社会貢献活動について、特徴的なものがあれば教えてください。

伊藤 青海工場では周辺地域の産業廃棄物を受け入れ、セメントの原料や燃料として再利用しています。環境に配慮した製品の中で好評なものの一つに軽量・薄肉化した発泡ポリスチレンによる食品用トレーがあります。これは形状を工夫することで従来の強度を維持しており、容器包装リサイクル法の改正に伴う社会のニーズに合致した商品として廃棄物の削減に貢献しています。また半導体製造時にシリコンウエハーを固定するための接着剤として、有機溶剤による洗浄が不要な製品を開発し、VOC排出削減等にも寄与しています。

—レスポンス・ケア活動における今後の目標を聞かせてください。

伊藤 資源生産性向上の一環として、ゼロエミッション活動を推進しています。廃棄物を限りなくゼロに近づけるということで、非常に判り易い目標として現場でも力を入れています。まず国内の主要工場で、できるだけ早期に達成したいと考えています。地球温暖化防止への取り組みに関して、京都議定書に基づく数値目標は原単位ベースでは既に達成していますが、更に厳しい自主的目標を策定し絶対量を削減する方向で取り組んでいます。社会との対話については、特に工場周辺地域の住民の方々と相互理解を更に深めていきたいと思っています。

—JRCCに対する要望はありますか。

伊藤 今、お話しした住民の方々とコミュニケーションについて、工場見学の受け入れやJRCCが主催する地域対話だけではマンネリ化が否めないと感じています。パフォーマンスの向上は自社だけの努力で何とかできますが、コミュニケーションは相手があることなので、各社の特徴的な事例をJRCC NEWS誌上で特集するなどして、紹介していただきたいですね。

事業所概要

三井化学(株)大阪工場は、1964年東洋高压工業大阪工業所として操業を開始しました。1968年に東洋高压工業と三井化学工業が合併して三井東圧化学が発足し、1970年には、エチレンプラント及びその誘導品の操業を開始しました。1997年には、三井石油化学工業と三井東圧化学が合併して三井化学大阪工場となりました。位置的には、大阪の中心部から南へ約17Km、関西空港から北へ約25Kmの堺・泉北臨海地区にあります。敷地は約155万㎡で、10万トン級のタンカーが入港できる大型棧橋を有しており、製品や原料輸送の半分を船で行っています。製品は、ナフサを主原料としたエチレンプラントからポリプロピレン、フェノール、ビスフェノールA、酸化エチレン、メタクリル酸メチル及びLNG、LPGを主原料としたアンモニア、尿素、メラミン並びにホルマリンやシランガスがあります。また2004年にはプロピレン増強やポリプロピレン30万トン設備の設置等を行い、工場の体質強化を図ってきました。



工場全景

レスポンスブル・ケア活動

①環境への取り組み

当工場は運河を隔てて住宅地と接しており、環境への配慮は特に重要視しています。大阪は全国有数の水質規制が厳しい地域ですが、これまで排水規制を満足するよう対応を図ってきました。2002年3月には環境マネジメントシステムISO14001の認証を取得し、継続的な改善を行っており、特に産業廃棄物は発生量に対する最終処分量の割合を2010年までに1%以下にする目標を定めて取り組んでいます。

②安全衛生、防災活動

2004年3月労働安全・衛生マネジメントシステムOHSAS18001の認証を取得しています。2005年度より「新生安全活動」として、リスクアセスメントによる継続的改善及び危険予知活動を主体に労働災害撲滅に取り組んでいます。防災活動では、公設消防との年2回の合同訓練や、毎月1回プラント毎に防災訓練等を実施しており、日頃から防災に努めています。



総合防災訓練

地域とのコミュニケーション

地域の皆様とのコミュニケーションとして、地域向けの広報誌を年3回発行しており、その中で様々な質問への回答を行っています。また、定期的な工場周辺の一斉清掃のほか、市内の全小学校7校や自治会等からの見学受入を実施しており、地域の方に工場を知っていただく機会も設けています。2006年には、近隣自治会から18名の方を工場にお招きして意見交換会を実施しました。本年度も実施の予定であり、更にJRCCの堺・泉北地区の幹事会社として地域対話を予定しており、地域に信頼される工場を目指して取り組んでいきます。



地域向け広報誌「たかしのはま」

事業所の概要

徳山製造所は、山口県東南部、瀬戸内海に臨む周南コンビナートに立地し、日本有数の規模(165万㎡)を誇るトクヤマの中核生産拠点です。主に無機化学品を製造する徳山工場、セメントを製造する南陽工場、多結晶シリコンや有機化学品を製造する東工場からなり、3工場は専用の海底トンネルと橋梁で結ばれています。また、22の社内バース(水深12m級)、公共埠頭(水深14m)など、優れた港湾インフラを有します。

1918年の操業開始より、当製造所は各事業がエネルギー、マテリアルおよび技術で強みに結びつく循環型製造所を目指してきました。現在では、無機・有機化学、セメント、電子材料などの工場が複合的に集積し、相互に原料・製品・副産物・廃棄物・ユーティリティを有効活用できるインテグレーションを形成しています。

さらに、社内廃棄物を燃料や原料として有効活用するなどゼロエミッション率は、ほぼ100%を達成しています。



製造所全景

レスポンスブル・ケア活動の取り組み

当製造所は、市内住居地域に近接して立地していることもあり、操業において「保安の確保は絶対条件」と考えており、設備及び作業の安全確保には徹底した取り組みを実施しています。安全パトロール、KY活動、ヒヤリハット活動、5S活動、指差呼称などの安全の基本活動を徹底し、発展継続するとともに、最近では、先んじて危険源を特定し、リスクを低減・解消する「先取りの安全」も積極的に進めています。

また、心と体の健康づくりを推進する中で重点課題としてメンタルヘルスをかかげ、2006年10月にメンタルヘルスへの取り組み意思の会社宣言として、「元気いきいき・トクヤマ宣言」を行い、トクヤマにとって最も

重要な財産である従業員の心の健康を守るための対策、活動を積極的に推進しています。

さらに、レスポンスブル・ケア活動の拡充と

質的向上を図るために、RC推進体制の充実や継続的改善、経営者による保安・環境監査、内部監査、第三者による審査等の充実を注いでいます。



内部監査

地域社会とともに

徳山科学技術振興財団の設立、RC地域対話の開催、小中学校への図書寄贈、森林整備や清掃のボランティア、環境イベントへの出展など、トクヤマは様々な機会を通して地域社会との共生に努めています。

なかでも、企業の環境保全などへの取り組みを地域の方々に理解していただく目的で、「RC地域対話」に積極的に取り組んでいます。JRCC山口東支部が主催する「第五回RC山口東地区地域対話」に積極的に参加しました。また、当製造所単独で「RC地域対話」を開催し、近隣の自治会婦人部の方々が参加され、「環境保全と保安防災への取り組み」について意見交換を行いました。



RC山口東地区地域対話

産業観光ツアー

さらに、希望者は事前に手続きをいただければ工場見学ができます。2006年度は、周南地域の商工会議所主催の「産業観光ツアー」も開催され、児童・生徒や地域の方々144名を含む約3,400名が、セメント工場の廃棄物再資源化施設などを見学されました。

開かれた企業を目指す当製造所では、今後も積極的に地域とのコミュニケーションを図ってまいります。

第31回

日化協・JRCC 安全賞、安全努力賞の表彰式、安全シンポジウムが行われました

平成19年度の第31回日化協・JRCC安全賞、安全努力賞が決定し、去る5月30日にパレスホテル（東京）にて日化協の通常総会で表彰されました。また、6月21日には安全シンポジウムが例年通り発明会館（東京虎ノ門）にて開催されました。

化学業界における自主的な保安・安全衛生の推進の一環として、日化協では昭和52年から、優れた安全活動を実施し模範となる事業所を表彰してきました。平成

12年からは、日化協・JRCC（日本レスポンスブル・ケア協議会）の共催として、環境安全委員会の安全表彰会議にて運営を行っております。

今年は13事業所から応募があり、安全表彰会議にて審査を行い特に優れた事業所を選定した後、安全表彰会議の上原議長と事務局で直接各事業所を訪問して具体的な活動内容を調査しました。その結果をもとに安全表彰会議にて安全賞、安全努力賞の事業所を決定しました。



安全賞	三井化学株式会社 市原工場
安全努力賞	旭化成ケミカルズ株式会社 川崎製造所 千葉工場
	旭化成メタルズ株式会社 友部工場
	昭和電工株式会社 研究開発センター（土気）
	チッソ石油化学株式会社 五井製造所

安全シンポジウム

6月21日に行われました「安全シンポジウム」では、受賞された各事業所長から活動内容の発表が行われました。また、第2部のパネルディスカッションではパネラーが事業所長であることから、トップの役割を中心として「いかにして無災害を継続するか」のテーマで

行われました。その概要をここでは紹介いたします。

活動事例の発表内容、及びパネルディスカッションの内容は、日化協のホームページに掲載いたしますので是非ご覧ください。http://www.nikkakyo.org/show_category.php?category_id=278&navRow=2

表彰式、安全シンポジウムが行われました

活動事例発表

三井化学（株）市原工場（竹本工場長）



- 千葉県市原市の京葉コンビナートにある市原工場は、エチレン、プロピレンをはじめとする基礎化学品のプラントを中心に35のプラントからなる工場です。
- 従業員750名（全従業員1400名）の工場で、97年5月から休業災害ゼロを継続しており、無災害時間は1750万時間を超えています。
- 日化協安全賞を93年にも受賞しています。
- 環境（ISO14001）、品質（ISO9001）、安全衛生（OHSAS18001）、及び保安等の管理システムを統合したGMS（General Management System）にて一元的に管理しています。
- 特徴のある活動としては、安全技術のボトムアップを図るために、SE（Safety Engineer）の育成を進めており、工場SEには大学にて1年間の安全工学教育を受けさせて、職場SE、シフトSEを育成しています。
- また理論と実践のバランスが取れた技術者を養成するため、プラント立ち上げの経験のない技術者が、プラントトラブルを体験できる伝承シミュレータを開発して、活用しています。
- 交代勤務者の申し送りを電子化して、効率化、正確化を図る取り組みを試行中です。

- 更に最近では環境、安全衛生、品質、保安管理の具体的な活動をTPM活動として実施しています。
- 活動の重点としては、テーマを決めた部長のパトロールで徹底して改善を行っています。
- またマニュアルをイラスト化して見やすくしたり、KY活動にもイラストを活用しています。
- 各活動内容はTPM活動掲示板で見やすい形で掲載しています。

旭化成メタルズ（株）友部工場（今里工場長）



- 旭化成ケミカルズ（株）の子会社として、メタリック調の塗料、インキに入れるアルミニウムペーストを製造している工場、茨城県笠間市にあります。
- 従業員は約100名で、平均年齢が36歳と若い人が多い工場です。89年6月から休業災害ゼロを継続しています。
- アルミ粉という爆発性のある材料を使っていること、多品種少量のバッチ生産のためマテハン作業が多いことから、これらに対する安全対策が重点となっています。
- 環境（ISO14001）、品質（ISO9001）認証に続いて、OHSAS18001を導入して、あらゆる作業のリスク評価を行って、リスクの低減を進めています。

旭化成ケミカルズ（株）千葉工場（岩崎工場長）



- 千葉工場は川崎製造所の組織に入っており、スチレン樹脂、変性ポリフェニレンエーテル樹脂、アクリル樹脂等の製造を行っている工場です。
- 従業員245名で、77年8月から29年10ヶ月間休業災害ゼロを継続しています（無災害記録時間は1172万時間）。
- 77年8月の休業災害を契機に「STOP活動」を導入して活動を行っています。

昭和電工（株）研究開発センター（土気）（坂本センター長）



- 研究開発センター（土気）は千葉市緑区の緑豊かな工業団地であり、研究開発センターと分析物性センター、安全性試験センターがあります。
- 従業員数は120名で、当地にセンターが移転してから（94年1月）休業災害ゼロを継続しています。なお移転前から通算すると22年以上無災害を継続して

第31回
日化協・JRCC 安全賞、安全努力賞の表彰式、
安全シンポジウムが行われました

- います。
- 研究センター単独でISO14001を取得しました。
 - 安全活動としては、徹底した整理整頓を行っています。総務部（環境安全担当）が不用品の回収までを担当して、不要器具類及び薬品まで大幅に削減しました。これによって実験室の通路確保等が充分できました。
 - 交通ヒヤリを含めたヒヤリハット活動も活発に行っています。
 - 化学品管理では、全品バーコードで管理していることと、毒物についてはIDカードによる薬品保管庫鍵の制御を行っています。

- しています。
- 従業員は725名で、94年6月から休業災害ゼロを継続中です（1723万時間）。
 - 五井製造所の安全活動の原点は、73年に起こったPPプラントの爆発事故であり、この事故の教訓を風化させないためにビデオを作製して、従業員に徹底しているとともに、社外にも貸し出しを行っています。
 - ここで、このビデオのダイジェスト版を放映しました。
 - 「安全常に」を基本理念として、理念、主旨を明記した防災手帳を従業員に携帯させています。
 - 具体的活動のうち特徴的なものは、機器HAZOPの導入、若手従業員の安全実体験講習への参加を行っています。



チッソ石油化学（株）
五井製造所（森村製造所長）

- チッソ（株）の子会社として、千葉県市原市にあり、PP、HDPE、基礎化学品の製造のほか、液晶を製造

パネルディスカッション



事例発表に続いて行われましたパネルディスカッションでは、上原安全表彰会議議長が司会を務めて、事例発表を行いました事業所長および日化協の豊田常務理事をまじえて、「いかにして無災害を継続するか」について議論が行われました。

前半では司会から各事業所のユニークな活動内容についての質問があり、事業所長からそれぞれ補足説明がなされました。主な内容は右記の通りです。

- SE制度について
 - 電子申し送りシステム
 - オープンラボ
 - 機器HAZOP
 - 簡素化したKY
 - 毒物管理システム
 - 2007年問題への対応
 - アルミ粉の取り扱い
- 後半では、無災害を継続するためのトップの役割とは何かについて、それぞれの事業所長の考え方を述べていただきました。

平成19年度
第1回
会員交流勉強会開催



2007年6月6日（水）に、消防会館会議室にてJRCC会員交流WGが主催する平成19年度第1回勉強会が開かれました。本年度は「(化学物質の)リスクってなんだ?」というテーマで日化協嘱託の花井莊輔氏に講師をお願いしており、3回に分けて勉強会を開催する計画です。受講申し込みは約120名で、第1回には97名と多くの方が受講され、熱心に聴講されていました。受講者の1人である日化協の河瀬恵信氏に、勉強会の感想を伺いました。



JRCC 会員交流勉強会に参加して

会社では毒性試験を担当し、現在は、日化協が主催し、産業技術総合研究所化学物質リスク管理研究センターに共催をいただいている「ケミカルリスク研究会」を担当してから、1年半になります。この間、化学物質のリスク評価については、リスク評価の個々の要素についての講演会を企画し、聴講してきました。しかし、リスク評価全体を俯瞰的に捉えた講演を聴く機会がなかったので、今回の勉強会はとても自分自身の勉強になりました。残された2回の勉強会が期待されることです。

化学物質のリスク評価は欧州REACHのポイントでもあり、日本においても、現在、化管法と化審法の見直しの審議が行われている中で、これからの化学物質管理政策が「ハザード管理」中心であったところから、曝露も評価した上での「リスク管理」を考慮したもの変わろうとしています。無数にある化学物質のリスク評価は行政だけでは対処

できず、企業が責任を果たさざるを得なくなることは容易に想像できるところで、リスク評価は「環境・安全」の要になってきます。

今回の勉強会で強く印象に残った部分が2つありました。これまで、毒性等のハザード評価に携わってきた者として、まず「曝露シナリオをしっかりと描くこと」が重要であるということです。おそらく、曝露を規定するものは、そのものの用途や使われ方であると思います。これを的確に把握して、評価をすればよい、とのことですが、これは、ここで想定している以外の用途や使われ方をすると、そこにリスクが生じるということです。化学物質を製造しているところを上流とすれば、実際にそれを使って、様々な製品を製造したり、配合したりするところの下流の情報がいかに大事かということだろうと思います。2つ目は、最後のスライド。「リスク評価の担当者が5人で議論をしている絵」でした。「リスク評価は1人だけで考えるのではなく、何人かの関係者と議論をし、相談をしながら進めていく」ということです。リスク評価には分野が異なる

様々なデータや推測値が必要になります。この絵のように、リスク評価に何人もの担当者がおられるような会社は良いですが、少人数で悩んでおられるところが多いのではないのでしょうか。今後は、不足している部分を補完することのできる、コンサルタントができる組織が必要になるのではないかと思います。

最後に、この勉強会に参加されている多くは、会社で「環境・安全」をご担当されている方々と思いますが、このようなリスク評価に関する勉強は、ぜひ、新製品の開発に当たっている研究者や事業担当者にしていただきたいものと思います。これからの世の中では、リスク評価が十分になされていない製品は排除されていくと思います。特に、新製品開発では、どのようなリスクが考えられ、どのようなリスク評価が必要になるかを見きわめていないと、最終段階で、開発を断念せざるを得ないような状況に立ちいたるのではないかと危惧されるからです。



2007 年度 ICCA RCLG (Responsible Care Leadership Group) 運営グループ会議参加報告

1. 日 時: 2007 年 5 月 4 ~ 5 日

2. 場 所: マイアミ

(インターコンチネンタルマイアミ)

3. 出席者: Philip Lewis 議長 (ローム・アンド・ハース) の他、米国 (ACC)、カナダ (CCPA)、ドイツ (VCI)、フランス (UIC)、スペイン (FEIQUE)、欧州 (Cefic)、ブラジル (ABIQUIM)、ニュージーランド (NZCIC) の担当者、および RCLG 広報誌 Careline の編集長らが出席。JRCC からは、吉原と八重樫 (文責) が参加した。

※ RCLG 運営グループ会議: RCLG 加盟 52 カ国のうち、主要な協会の担当者が年に一度集まる会議。メンバーは、毎月の電話会議でも討議を行っている。

4. 主な議題と内容

(1) ICCA (国際化学工業協会協議会) 統治機構改革の報告

(2) WBCSD (持続可能な開発のための世界経済人会議) 化学分野プロジェクトの報告

(3) レスポンシブル・ケア世界憲章への署名

計 115 社、50 協会が署名している。今後とも署名を働きかけると共に、既に署名した企業へのコミュニケーション策を検討することとなった。

(4) ロシア、中東、中国への RCLG 加盟国拡大

ロシア、GPCA (仮称: 湾岸石油化学・化学協会)、

CPCIA (中国石油・化学工業協会) が既にレスポンシブル・ケア活動を始めており、RCLG への加盟に関心を示しているため、今後の方策を検討した。

(5) 世界憲章行動計画

ロゴマークの使用法、マネジメントシステムと検証、プロダクトステewardシップ、ステークホルダー対応、キャパシティ・ビルディング等を検討する各ワーキンググループより報告が行われた。

5. 次回開催日時と場所

RCLG 会議: 2007 年 10 月 22 日 (月) ~ 24 日 (水)、
パリ

※ RCLG 会議: RCLG 加盟 52 協会の担当者が参加する総会。



RCLG 運営グループ会議風景



2007 年度 ACC (米国化学工業協会) レスポンシブル・ケア会議 参加報告

1. 日 時: 2007 年 5 月 6 ~ 9 日

2. 場 所: マイアミ

(インターコンチネンタルマイアミ)

3. 出席者: 主に化学・物流・緊急時対応サービス・マネジメントシステムサービス等の ACC 会員企業から、340 名以上が参加した。JRCC から吉原と八重樫 (文責) が出席。

4. 概要

開会式

Jack Gerard 氏 (President and CEO, ACC) の開会挨拶後、レスポンシブル・ケア リーダー賞の受賞者発表、および Carolyn Merritt 氏 (米国化学物質安全性調査委員会委員長兼 CEO) による基調講演が行われた。

米国化学物質安全性調査委員会 (U.S. Chemical Safety and Hazard Investigation Board) は化学事故を調査するための独立した連邦政府機関で、理事は大統領が指名する。理事が 5 名、フルタイム職員が 37 名おり、2006 年で 920 万ドルの予算を持つ。年 600 件の事故報告が入り、うち 20 件は評価が必要な事故で、年間 6 ~ 10 件の調査を行っている。本講演では、実際に起きた事故の原因が説明され、中小企業の情報収集と従業員教育が課題としてあげられた。

分科会

「世界憲章、GPS、およびその他の ICCA 活動」、「プロダクトステewardシップ: GPS, REACH, GHS 等」、「グローバルなマネジメントシステムの実施」、「サプライチェーンとの連携」、「ステークホルダーとのコミュニケーション」、「緊急時対応」、「レスポンシブル・ケアの

認証」等の分科会が開催された。

閉会式

Craig Conklin 氏 (米国国土安全保障省) より、2007 年 4 月に明らかにされた、テロリストの攻撃に対する化学工場の安全規制に関する説明が行われた。また、ACC 会員企業から、レスポンシブル・ケアのセキュリティ・コードと上記の安全規制に関する発表が行われた。

※ 本会議資料は、以下のウェブサイトからダウンロード可能
http://www.rctoolkit.com/2007_conference.asp

5. 次回開催日時と場所: 2008 年 4 月 27 ~ 30 日、
マイアミ (インターコンチネンタルマイアミ)
ACC のレスポンシブル・ケア 20 周年記念



ACC RC 会議における世界憲章・GPS・ICCA 活動に関するワークショップ風景

RC 検証を受審して

関西ペイント株式会社 平塚事業所長 坂本 廣



当社は1992年にRC活動を開始し、1995年のJRCC発足と同時に加入し、現在に至っています。また、塗料工業界におけるRC活動をコーティング・ケアと称し、国際塗料インキ協議会の活動のひとつとして、当社も2002年にコーティング・ケア実施宣言をしております。RC検証は今回が初めてで「労働安全衛生」に対する取り組みについて検証を受けました。

【検証を受けてよかった点】

RC活動を始めて10年以上経過し活動が日常的なものとなっている反面、RCの精神といった基本的なことを忘れがちになっていたところをご指摘いただいたことは今後の活動において従業員それぞれの思いに重みを感じさせることができると思います。特に新人への教育ではRCが法遵守のみならず自主的改善活動であるという高い理念のもとに行われているとの意識づけになり、改めて基本の重要性を感じました。

また、今回受審した労働安全衛生については当社ではKYT活動がすべてという方針で工夫を凝らした活動を実施しています。その有効性も概ねご理解いただき、高く評価されましたが、反面、化学物質の危険に

対するKYTの強化を薦められ、当社流KYTを更に進化させるための参考にしたいと思っております。

【改善が望ましいと思われる点】

事前に質問表への記入回答を提出し、その内容を実地で確認するという方法での検証でしたが、その中の方針の項目で「レスポンスブル・ケア」の語句を使っているかをしつこく質問されています。いささか高圧的に感じてしまいました。RCは環境保全と安全衛生の方針を達成するための手段・運営として活動するものと認識しております。語句として用いることに拘らなくてもいいような気がします。

もうひとつ、質問表で気になることとして分類をなぜ英語表記されているのでしょうか。それぞれ適切な日本語があると思います。利用する者が違和感なく使えるようご配慮いただければ幸いです。

色々と感じるままに述べさせてい

ただきました。今回の受審で工場を見ていただいた際、日頃の改善改革活動の成果である「光り物」と称して表示している改善箇所にも興味を示していただき、現場担当者もまた新たな気持ちで活動に取り組んでいけるものと感謝しております。今後ともよろしくお願いたします。



【光り物】静電気除去用アース線。使用後クリップを離すとアース線がポスト内に収納される。



検証センターからのコメント

- ・社長がレスポンスブル・ケア（RC）の実施を宣言している限り、社内でも、RCという言葉は普及していることが大切です。社員がRCの精神を理解していることも必要です。
- ・英語の表記は、改めていくように検討します。

質問項目 ①出身会社 ②職歴 ③検証における強み・心がけていることなど ④趣味 ⑤その他



小高 弘光

①旭硝子㈱
②2000年5月に日化協へ出向、JRCC事務局にてRC報告書の作成や地域対話、消費者対話等を推進。また、安全表彰の事務局として、多くの工場、事業所へ現地審査に伺い、大いに勉強させていただきました。

③2005年より検証業務に携わり、報告書検証の経験が多いのですが、活動検証でも、上記の経験を活かしていきたいと思っています。

④趣味とは言えないかも知れませんが、種々のインターネットHPを覗いています。

⑤東京・荒川区尾久で生まれ、戦時のため、すぐに埼玉県浦和市（現さいたま市）に移り住み故郷となりました。浦和駅周辺の変貌振りには驚かされています。現在は、東京・府中市に在住です。



白石 翼

①三井化学㈱
②大船の研究所からスタートし、工場（千葉、山口）、本社（東京）と周り研究、製造、管理業務と一通り体験しましたが、環境保安担当部署に籍をおいたことはありません。定年の4年前から日化協にお世話になり、安全管理センターで化学物質の総合安全管理に携わり、エンドクリン問題、OECDリスクリダクション、リスクコミュニケーションなど環境問題に取り組みしました。

③定年後、暫くしてJRCCのRC検証制度の構築に携わり、2002年に制度がスタートしてから、この4年間で述べ23社の検証審査に当たりました。私は、現役時代から、製造現場、製造プラントへの関心・興味が強いので、工場にて皆さん方と意見交換できることを楽しみにしています。

④趣味は、スポーツ全般（実技、観戦）ですが、現在は、ゴルフにはまり、年間50ラウンド程度、プレーしています。また、昨年は、夏に、スイス・アルプスでのハイキング、暮れにエヴェレスト眺望ヒマラヤ・トレッキングと念願の山歩きを楽しみました。なお、ポケ防止に、時々暮会所に顔を出しています。

⑤私は、生まれも育ちも東京です。本郷弥生町で生を受け新宿で育ちました。



福永 忠恒

①住友化学㈱
②工場、事業部、研究所を経験後、環境安全部、その後物流子会社の経営を担当後、以前からの約束であったJRCC検証に2005年から参画した。環境安全担当の間、当時の通産省、環境庁、経団連等の各種委員会に参画してRCの自主的取組が如何に効果があるかJRCC各社の方々と共にRCの浸透に努力した。また、JRCCの立ち上げに当初から参画し、各社のRC担当の方々と共に化学業界への浸透とJRCCの会員企業の増強に走り回った。

③上記のような経験から、会員企業がRCの発祥の精神である企業倫理の更なるレベルアップとその結果であるRCのパフォーマンスの向上に努め、社会から一層、信頼と信用が得られるよう検証を通じて会員企業のRC全般のレベルアップに向けて努力して参りたいと思っています。

④春は桜を追いかけて、秋は紅葉を追いかけて、いずれものんびりと温泉で土地の美味しいお酒を楽しむこと。地方地方で特徴ある工夫された隠れた美味しい金賞受賞のお酒があることが徐々に解ってきました。お酒と同様、化学企業も特徴のある金賞受賞の企業が世界に飛躍することを願っています。

⑤生まれは霞ヶ浦潮来、霞ヶ浦から南の地方を転々としてその後永年生活しているところが神奈川県藤沢市。



寺田 雄揮

①大日本インキ化学工業㈱
②2004年退社まで20年余り品質管理、品質保証の業務を担当しました。RCに関しては、業務を通じての知識、独学によるものです。

③2005年に検証員になりまして、まだ3回の検証経験しかございませんが、「こういう見方・考え方もあるのだな！」と学ぶことが沢山あります。方針管理、環境測定、測定技術について、今までの経験が生かせると思っています。

④歩くことが好きで、地域の「歩こう会」に参加して13年になります。毎月コースを決めて山歩きをし、その距離数を競っております。名所旧跡を訪ね歩くことが好きで、今、住んでいる街（大阪府阪南市）にも熊野古道があります。

⑤愛媛県西条市（旧周桑郡壬生川町）出身です。石鎚山を仰ぎ、海で貝を堀り、田んぼをかけまわったり、今では、あまり見られなくなりましたが、打ち抜き水（自噴水）を飲んで少年時代を過ごしました。

JRCC 会員交流会 (大阪) 開催

平成 19 年度上期 JRCC 会員交流会が、7 月 4 日に大阪堂島ホテルにて開催され、関西地域にある JRCC 加盟事業所を中心に、約 80 名が参加しました。

交流会では、第 1 回 RC 賞の授賞式が行われ、受賞 5 社から 6 名の受賞者が参加して企画運営委員会幹事会の春山主査より表彰を受けた後、各受賞内容の発表を行いました。発表で紹介された活動内容は、RC 賞を受賞されただけにそれぞれ素晴らしいものであり、他社にとって今後 RC 活動の質の向上に大いに役立つものでした。



交流会では、「産業廃棄物」「地域社会との対話」「ハザード管理からリスク管理へ」「労働安全」「RC から CSR への拡大」の 5 つの分科会に別れ、それぞれ 10 ～ 20 名が参加して討議を行いました。各分科会のテーマは、RC 活動を進める上で重要であることから、参加者の関心は非常に高いものがありました。いずれの分科会でも、話題提供者より事例の紹介が行われた後、各参加者より自社の直面している課題やうまくいった事例の紹介など具体的な事例が次々と提供され、非常に活発な意見交換が行われました。分科会の時間が短くて折角議論が盛り上がったところで中断せざるを得なかったという意見もあり、次回からはもう少し長くする必要がありますかと思えます。少人数で複数の分科会を設けることにより、各社が最も関心のあるテーマに参加して深く討議・意見交換を行うことができ、ベストプラクティスの共有に大いに有効であると思われることから、今後も分科会方式を継続していく予定です。



春山主査



会員交流 WG・塩崎主査



関西ペイント・小田氏



宇部興産・阿部氏



三菱レイヨン・藤田氏



東燃化学・藤田氏



三菱化学・三木氏



JRCC 中田

JRCC NEWS

RESPONSIBLE CARE 2007

No.46
SUMMER

表紙写真：ヤマセミ
撮影：高橋力（三井化学）

Index

第13回通常総会開催	2
Voice	4
主婦連合会会長 兵藤美代子	
第1回RC賞 受賞者紹介	5
from Members【第42回】	6
電気化学工業(株) 代表取締役専務 技術総括 伊藤 東さん	
RCの現場を訪ねて	8
三井化学(株)大阪工場 (株)トクヤマ 徳山製造所	
第31回 日化協・JRCC 安全賞、安全努力賞の表彰式 安全シンポジウムが行われました	10
平成19年度 第1回 会員交流勉強会開催	13
2007年度 ICCA RCLG運営グループ会議参加報告	14
2007年度 ACCレスポンスブル・ケア会議参加報告	15
RC検証を受審して	16
関西ペイント(株) 平塚事業所長 坂本 廣	
検証員紹介	17
JRCC会員交流会(大阪)開催	18
JRCCだより	20

編集後記

●● 本号の表紙写真は三井化学市原工場開発センター高橋力氏に提供していただきました。実は三井化学市原工場の応接室に置かれていた平凡社発行の写真集「ヤマセミ」が発端でした。報告者(新井)はバードウォッチングが趣味で以前からこの本に注目していましたが著者高橋氏は該事業所に勤務されているということでした。そういえば著者略歴に「千葉県内の化学工場に勤務している」と記されていました。たまたま今年の表紙のテーマは野鳥であり無理を承知で掲載をお願いしたところ快諾を得ました。

●● 本号は安全表彰の記事を掲載していますが、安全賞受賞の事業所勤務の方の写真が表紙を飾るのも何かの縁を感じます。高橋さん改めてご協力に御礼を申し上げます。

●● 表紙写真投稿のお願い：裏表紙には従来会員企業の投稿写真を掲載しておりますが表紙についても会員の投稿をお願いします。年度ごとにテーマを設定する予定ですが、当面「野鳥」をテーマと致します。

お詫びと訂正：春季号の6ページ記事、「事例発表 コンプライアンス：三井デュポンポリケミカル(株)大島義昭氏」は大島悟氏の誤りでした。お詫びして訂正致します。